

包括的合理的思考アセスメントにおける陰謀論信念との関連要因： 日本における追試的検討

Correlates of conspiracy belief within the comprehensive rationality assessment: A replication study in Japan

岩田 叡治[†], 今井 むつみ[‡], 清河 幸子[†]

Eiji Iwata, Mutsumi Imai, Sachiko Kiyokawa

[†] 東京大学, [‡] 今井むつみ教育研究所

The University of Tokyo, Imai Mutsumi Educational Laboratory

iwt-univ@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

概要

本研究では、陰謀論信念と合理的思考に関わる認知要因との関連を調査した Stanovich & Toplak (2024) の結果が日本において再現されるかを検討した。日本のクラウドソーシングサイトを通じて募集した290名が、陰謀論信念、超常的思考、開放的思考、確率的推論の尺度に加えて SNS の利用時間や陰謀論についての知識について回答した。重回帰分析の結果、陰謀論的信念と超常的思考との間に正の関連が、開放的思考との間に負の関連が見られたが、確率的推論との関連は見られなかった。

キーワード：陰謀論 (conspiracy theory), 陰謀論信念 (conspiracy belief), 超常的思考 (superstitious thinking), 開放的思考 (actively open-minded thinking)

1. 問題と目的

近年、出来事の原因を強力な主体による秘密裏な計画によるものとする陰謀論に関して、特に政治や公衆衛生の領域で心理学的研究が盛んに行われるようになっていく。人々が陰謀論信念を抱くことによる問題には、公衆衛生や気候変動などへのコミットメントや政策支持の低下が指摘されている (Biddlestone et al., 2022)。

そういった陰謀論信念についてどのような認知的要因が関わっているのかを調査するために、Stanovich & Toplak (2024) は合理性を測るアセスメント群で構成される包括的合理的アセスメント (Stanovich et al., 2016) を用いて検討した。これには、具体的な陰謀論を示し、それらをどの程度信じているかを問う「陰謀論信念尺度」、占いや「黒い猫は不吉」といった迷信などをどの程度信じるかを問う「超常的思考尺度」、意思決定の柔軟性を問う「開放的思考尺度」、基礎的な確率の問題を問う「確率的推論尺度」が含まれる。陰謀論的信念を目的変数とし、各変数を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、最も当てはまりがよかったのは超常的思考、開放的思考、確率的推論の3つを説明変数としたものであった。このうち超常的思考は陰謀論的信念と正の関連があり、残りの2つは負の関

連が見られた (表2に結果を示す)。

本研究では、上記の Stanovich & Toplak (2024) の結果が日本において再現されるかどうかを検討する。Ozono & Sakakibara (2023) では、欧米圏で見られた熟慮的思考による陰謀論信念の抑制効果が日本でも再現された。このことから、本研究においても、Stanovich & Toplak (2024) の結果が再現され、陰謀論信念は超常的思考と正の関連が、開放的思考や確率的推論とは負の関連が見られると予測する。

2. 方法

2.1 参加者

Yahoo!クラウドソーシングを通じて募集した、成人298名 (男性246名、女性52名; 平均年齢50歳, SD=9.87) が調査に参加した。参加者は、1人あたり80円相当のデジタル通貨を報酬として受け取った。

2.2 尺度

2.2.1 属性情報

Stanovich & Toplak (2024) と同様に参加者の属性情報として、性別と年齢を尋ねた。また、政治的信念を「1: 保守的である」から「6: リベラルである」の6件法で、宗教的信念を「1: 神は存在しないと確信している」から「6: 神は存在すると確信している」の6件法で回答するよう求めた。これに加えて、本研究では SNS の利用時間を「1: 30分未満」「2: 時間~3時間」「3: 3時間~5時間」「4: 5時間」の4件法で回答するよう求めた。

2.2.2 包括的合理的思考アセスメント

Stanovich & Toplak (2024) において用いられた包括的合理的思考アセスメント (Stanovich et al., 2016) のうち、陰謀論信念尺度、確率的推論尺度、開放的思考尺度、超常的思考尺度を用いた。いずれの尺度も、第一著者が訳した。

陰謀論信念尺度は、陰謀論についての信念を測る尺度であり、偽の陰謀論に関する24項目、真の陰謀論に

関する 5 項目で構成されていた。Stanovich & Toplak (2024) においては陰謀論信念得点の算出には偽の陰謀論に対する回答のみが用いられていたことから、本研究でも偽の陰謀論に関する項目への回答のみを分析に使用する。

確率的推論尺度は、「表と裏がそれぞれ 50%の確率で出るコインがあります。5 回連続で表が出ている場合、6 回目はどちらの結果が起きやすいでしょうか」のように確率に関するリテラシーを測る 18 項目の文章題で構成されていた。

開放的思考尺度は、「人々は常に自分の意見に反する証拠も考慮すべきである」といった意思決定や情報取得の柔軟性を測定する 13 項目から構成されていた。この尺度については、「1: 強く反対する」から「6: 強く賛成する」の 6 件法での回答を求めた。

超常的思考尺度は、「黒猫が目の前を横切るのは不吉です」などの占いや未来予測能力などの超常的・迷信的な概念についての信念を測る 12 項目で構成されていた。この尺度についても、「1: 強く反対する」から「6: 強く賛成する」の 6 件法での回答を求めた。

2.2.3 知識テスト

陰謀論信念尺度に含まれている具体的な陰謀論に関して、その陰謀論を信じていない場合と知らない場合を区別できるように、29 項目の個々の陰謀論についての知識を「1: まったく知らなかった」から「4: 詳しく知っている」の 4 件法で回答するよう求めた。

3. 結果

3.1 スクリーニングと相関分析

回答に際して不注意であった参加者のデータを除外するために、以下の 3 つの質問のうち 1 問でも不正解だった者のデータを分析から除外した。具体的には、確率的推論尺度内に「この質問は 012 と入力してください」という設問を、陰謀論信念尺度内に「この質問は”強くそう思う”を選択してください」、「この質問は”全くそう思わない”を選択してください」という設問を挿入した。この基準により、最終的に 8 名のデータを除いた 290 名のデータを分析に用いた。陰謀論信念と各変数との相関係数を表 1 に示した。

3.2 陰謀論信念を目的変数とした重回帰分析

陰謀論信念を目的変数として全ての変数を用いた重回帰分析の結果を表 2 に示す。Stanovich & Toplak (2024) においては、超常的思考、確率的推論、開放的思考の 3

表 1 陰謀論信念との相関	
	陰謀論信念
年齢	.128 *
政治的信念	-.023
宗教的信念	.285 **
SNS の利用時間	.204 **
確率的推論	-.317 **
超常的思考	.531 **
開放的思考	-.425 **
知識テスト	.192 **

** p < .001; * p < .05

変数しか投入されていなかったが、本研究では全ての変数を投入した。全ての変数を説明変数とした重回帰モデルの決定係数 R^2 は.36（調整済み決定係数 $Adj. R^2$ は.34）、Stanovich & Toplak (2024) と同様に超常的思考、開放的思考、確率的推論を説明変数とした場合の決定係数 R^2 は.323（調整済み決定係数 $Adj. R^2$ は.316）となった。

Stanovich & Toplak (2024) で投入されていた変数のうち、超常的思考は陰謀論的信念と有意な正の関連が見られた。また、開放的思考は負の関連が有意となった。確率的推論に関しては、有意な関連が見られなかった。本研究で独自に投入した変数のうち、年齢と知識テストに関して、有意な正の関連が見られた。

4. 考察

本研究では、日本において Stanovich & Toplack (2024) の追試を行った。その結果、陰謀論信念を目的変数とした重回帰分析において超常的思考とは正の関連、開放的思考とは負の関連が見られるといった点において先行研究の結果が追認された。それに対して、Stanovich & Toplack (2024) では負の関連が見られていた確率的推論に関しては、有意な関連が見られなかった。

以上より、陰謀論信念と超常的思考および開放的思考の関連は、ある程度、文化によらず頑健なものであると考えられる。それに対して、確率的推論との関連に関しては、文化差の影響がうかがえる。Sato et al. (2024) では欧米諸国で見られる陰謀論信念と教育レベルとの関連が日本では見られず、教育レベルが低い人ほど COVID-19 に関する陰謀論信念を抱きにくいという逆

表 2 陰謀論信念を目的変数とした重回帰分析の結果

	Stanovich & Toplak (2024)		本研究		
	β		β	t	信頼区間 (2.5% ~ 97.5%)
年齢			0.126	2.536	* (0.028 ~ 0.224)
政治的信念			-0.025	-0.516	(-0.120 ~ 0.070)
宗教的信念			0.051	0.936	(-0.056 ~ 0.157)
SNS の利用時間			0.070	1.386	(-0.030 ~ 0.170)
確率的推論	-0.167	**	-0.057	-1.036	(-0.164 ~ 0.050)
超常的思考	0.340	**	0.330	5.119	** (0.203 ~ 0.457)
開放的思考	-0.148	**	-0.238	-4.192	** (0.203 ~ 0.457)
知識テスト			0.102	2.010	* (0.002 ~ 0.202)

** p < .001; * p < .05

の関連が示された。このような文化によって陰謀論信念と他の認知的要因の関連が異なるのはなぜかについてさらなる検討が必要である。

5. 文献

Biddlestone, M., Azevedo, F., & van der Linden, S. (2022). Climate of conspiracy: A meta-analysis of the consequences of belief in conspiracy theories about climate change. *Current opinion in psychology*, 46, 101390. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2022.101390>

Coady, D. (2021). Conspiracy theory as heresy. *Educational Philosophy and Theory*, 55(7), 756–759. <https://doi.org/10.1080/00131857.2021.1917364>

Ozono, H., & Sakakibara, R. (2024).The moderating role of reflective thinking on personal factors affecting belief in conspiracy theories. *Applied Cognitive Psychology*, 38(1), e4142. <https://doi.org/10.1002/acp.4142>

Sato, Y., Kawachi, I., Saijo, Y., Yoshioka, E., Osaka, K., & Tabuchi, T. (2024). Correlates of COVID-19 conspiracy theory beliefs in Japan: A cross-sectional study of 28,175 residents. *PLoS ONE* 19(12): e0310673. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0310673>

Stanovich, K. E. (2016). The comprehensive assessment of rational

thinking. *Educational Psychologist*, 51(1), 23–34. <https://doi.org/10.1080/00461520.2015.1125787>

Stanovich, K. E., & Toplak, M. E. (2024). Conspiracy beliefs in the context of a comprehensive rationality assessment. *Thinking & Reasoning*, 35(1), 1–23. <https://doi.org/10.1080/13546783.2024.2368026>

Stecula, D. A., & Pickup, M. (2021). How populism and conservative media fuel conspiracy beliefs about COVID-19 and what it means for COVID-19 behaviors. *Research & Politics*, 8(1). <https://doi.org/10.1177/2053168021993979>

Sternisko, A., Cichocka, A., & Van Bavel, J. J. (2020). The dark side of social movements: social identity, non-conformity, and the lure of conspiracy theories. *Current opinion in psychology*, 35, 1–6. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2020.02.007>